美味しいお話

2015年 7月

本の中に出てくる食べ物が、
９日（木）給食にも登場します。

食育の日は19日ですが、今月の19日は給食がないので…

９日の献立
あなごごはん　千種焼き
すまし汁　牛乳

**紹介した本は
学校図書館で展示中。
借りられます！**

アナゴ　『少年Ｈ』

妹尾河童／講談社／９１３－せ

昭和10年代、洋服の仕立て屋の父、熱心なクリスチャン（キリスト教信者）の母、2歳下の妹、敏子と神戸の下町に暮らしていた「少年H」こと妹尾肇。

こんな変わったあだ名がついたわけは、本を読んでみてください。

好奇心旺盛なH少年は、友だちと近くの海や山をかけまわったり、（悪）知恵を働かせてお祭りの見世物をただでのぞいたり、遊びに大忙しの毎日を送っていました。

当時すでに日中戦争は始まっていましたが、Hたちにとって戦争はまだまだ遠い世界のできごと。けれど少しずつ、戦争は迫ってきます。

思想に対する取り締まりが厳しくなり、Hがレコードを聞かせてもらったりしていた近所のお兄ちゃんは特高に連行されてしまいます。

特高：特別高等警察の略。思想犯罪に対処するための高等警察。内務省直轄で、社会運動などの弾圧にあたった。第二次大戦後廃止。
『広辞苑　第６版』岩波書店参照

そしてHが5年生の時には、太平洋戦争がはじまり、人々の生活が苦しくなってくるにつれ、父の所には仕事が来なくなります。やがて父にスパイ容疑がかけられ・・・。

当時は日本中のほとんどの人が戦争に勝つと信じていた（少なくとも言っていた）中で、自分が納得できないことに対して黙っていることのできないHにとっては辛い日々が続きます。

好奇心旺盛で利かん気のH少年の物語はとても面白いです。面白いだけでなく、戦後70年を迎える今、ぜひ読んでほしい本です。

『はだしのゲン』と同じ時代を生きたH少年の物語、ぜひ読んでみてください。
とりあえず、「海の子」「地図と卵」の章だけでも読んでみて、読めそうだなと思ったら全部読むのでもよいと思います。

ところで肝心の**「アナゴ」**はどこに出てくるかというと・・・「防毒マスクとスパイ」の章に、Hが友だちのイッチャンと夜の浜辺にアナゴ釣りに行くシーンがあります。この章の前にも、アナゴ釣りのことは出てきているので、当時わりと身近な食べ物だったようです。

結局、Hは1匹も釣れませんでしたが、イッチャンは2匹釣りあげました。イッチャンの家ではこのアナゴ、どうやって食べたのでしょうね。

アナゴ

ウナギ

「穴子」「鰻」「鱧」 全部読めますか？　どれも、細長くてにょろにょろしたウナギ目の魚です。海底近くを生活の場とし、体全体を蛇行させて泳ぐ、「レセプトファルス幼生」という成長段階を経るなどの共通の特徴があります。ただ、ウナギだけはシラスウナギに変態した後、川をさかのぼって成長し、数年後に海に戻るという点が、アナゴやハモとは違っています。

『食材図典』小学館食材図典編集部編／小学館／1995年／498－し　参照

今年の青少年読書感想文コンクールの課題図書の1冊が、『うなぎ一億年の謎を追う』（塚本勝巳／学研教育出版）という本で、もうすぐ図書館に入る予定なので、興味を持った人はこちらも読んでみてください。

答えは、「アナゴ」「ウナギ」「ハモ」です。

（学校司書　鈴木あゆみ）